信州の生んだ名著を読む

Vol. 1 仏教に親しむ

仏教の入門書『津金寺名目』とは

天台宗典編纂所編輯員　藤平　寛田さん

聞き手　醫王院副住職　矢崎　長潤

長野県北佐久郡立科町にある津金寺は、正式には慧日山修学院津金寺といい、千三百年の歴史を有する天台屈指の名刹である。また、当院とも歴史的に深い関係のある寺院である。津金寺には、数多くの寺宝が伝わっており、文化財指定を受けているものも少なくない。その中、数年前、前住職であった故・矢崎大悟師の発願により刊行された『津金寺名目（天台圓宗四教五時津金寺名目）』は、天台宗の研究者らによって解明され、纏められた研究書であるが、近年の仏教ブームの中、ほかの仏教の書籍とともに注目を浴びている。

今回、日本の中世仏教を研究している天台宗典編纂所の藤平寛田編輯員に、当院とも縁の深いこの書を通じて、天台の思想について語っていただいた。

矢崎　仏教の初学書といわれています、この『津金寺名目』ですが、これはどのような経緯で書かれたのでしょうか。

藤平　天台宗の根本経典は、『法華経』[注1]です。この『法華経』こそが、仏様の教えの最も大切なお経であると天台宗では考えます。ですから天台（＝天台の僧侶は、仏教の教えに天台の教義を学ぶわけです。そして、その最も重要であるものに「天台三大部」と呼ばれる書物があります。『法華文句』[注2]『法華玄義』『摩訶止観』の三つで、中国の小釈迦といわれ、天台宗の実質的な開祖である天台大師智顗（五三八～五九七）の作です。今でも書店に漢文の原典や訓読された本が並んでいますし、仏教を学ぼうと思う方なら一度は耳にしたことがあるかと思います。

しかし、これらはそれぞれが二十巻と膨大な容量で、内容も非常に複雑で難解なものです。とても素人では歯が立つものではありません。相当な仏教学の知識があって、はじめて読み進めることができるのです。

そこで時代が下っていく中で、多くの学僧が出てきて、天台の真髄を学ぶ前段階に、分かりやすいように術語に解説を加え、初心者の勉強のために、時に議論のためにと、大事な言葉の要点を纏めていくようになりました。さらに、それらの要点だけを取り出して整理し、見出しを作り、一種のビギナー向けの入門書を作っていったのです。この『津金寺名目』もそのような経緯を経て、作られていったのだと思います。

矢崎　書名にあります津金寺は、寺院名ですけれども、その後に続く「名目」とは、どのような意味なのでしょうか。

藤平　「名目」というのは、もとは仏教用語を説明した辞書のようなものを指していました。そのうちに、このような入門書にも用いられるようになりました。つまり、『津金寺名目』とは、「信州の津金寺というお寺で書かれた仏教の入門書」であると考えていいでしょう。

矢崎　とすれば、かなり時代が下り、「天台三大部」などの研究が進むなかで出来上がってきたものですね。インドの[注3]アビダルマ（論書・経典に対する注釈書）も膨大な文献を完成させた後に、簡易な入門書を作りますが、それに似ていますね。

藤平　そうですね。もっとも、天台大師の著した『法華四教義』[注4]『法界次第初門』という書物がありますし、仏教を学ぼうと思う方なら一度は耳にしたことがあるかと思います。

しかし、これらはそれぞれが二十巻と膨大な容量で、内容も非常に複雑で難解なものです。とても素人では歯が立つものではありません。相当な仏教学の知識があって、はじめて読み進めることができるのです。

そこで時代が下っていく中で、多くの学僧が出てきて、天台の真髄を学ぶ前段階に、分かりやすいように術語に解説を加え、初心者の勉強のために、時に議論のためにと、大事な言葉の要点を纏めていくようになりました。さらに、それらの要点だけを取り出して整理し、見出しを作り、一種のビギナー向けの入門書を作っていったのです。この『津金寺名目』もそのような経緯を経て、作られていったのだと思います。

矢崎　書名にあります津金寺は、寺院名ですけれども、その後に続く「名目」とは、どのような意味なのでしょうか。

藤平　「名目」というのは、もとは仏教用語を説明した辞書のようなものを指していました。そのうちに、このような入門書にも用いられるようになりました。つまり、『津金寺名目』とは、「信州の津金寺というお寺で書かれた仏教の入門書」であると考えていいでしょう。

矢崎　とすれば、かなり時代が下り、「天台三大部」などの研究が進むなかで出来上がってきたものですね。インドの[注3]アビダルマ（論書・経典に対する注釈書）も膨大な文献を完成させた後に、簡易な入門書を作りますが、それに似ていますね。

藤平　そうですね。もっとも、天台大師の著した『法華四教義』[注4]『法界次第初門』という書物がありますが、これは「名目」に似たような形でつくられておりますので、昔からあるともいえます。仏教学では、①「もとの教義に解説を加える」→②「専門的で難解な論書ができる」→③「それを整理して簡易に纏める」といったサイクルが伝統的になされているともいえます。

矢崎　今ではいろいろなテキストや入門書がありますが、仏教系の大学では、こういった「名目」を使用した授業もあると聞きます。天台の場合は、そのほかの『名目』として、『西谷名目』[注5]なども有名です。このような体裁の文献は、多くあるのでしょうか。

藤平　日本では昔から初学者は、このような「名目」で勉強をはじめていたようです。ですので、相当数の「名目」が作られました。いろいろな整理の仕方があったようですが、実はそのベースとなる文献があったのではないかと言われています。叡山浄土教の開祖とされる恵心僧都・源信（九四二～一〇一七）の『四教五時略頌』ではないか、と。これは、恵心僧都の真撰（自身の手で書かれたもの）であるとされています。昔の人は、これを木魚を叩きながら、朝夕のお勤めでお唱えして、私たちが般若心経を唱えるようにして帰りました。[注6]口伝法門といわれますが、一種の奥義のような大切な教えも伝えられています。今のような単なる宗派への帰属意識はそれほどなかったかもしれません。宗派のカテゴリーというよりは、学問的興味につき動かされて、学問所を転々としながら、勉強していたようです。またあるものは、自宗の教義を明確にするためにも天台を学ぶ必要があったのだと思います。

その後、比叡山は焼き討ちにあってしまい、多くの重要な典籍が焼失してしまいました。また長い歴史の中で火災などにより関東の有力寺院に大切に保管されていた文献は、不幸にも失われてしまったものも少なくありません。実はそういう大切なものの多くが身延山には残っておりまして、そういった七百年前に身延山の僧たちが持ち帰った天台の典籍を、天台宗典編纂所では、現在、逆に調査に行ってくるという仕事もしています。当時と全く逆のことを七百年後の今しているわけですね。

矢崎　今でも宗派を越えた付き合いが続いているのですね。当時の僧侶が、自由に学問を修めることができたということは、それを経済的に支えた有力者がいたわけですか。

藤平　おそらく当時の権力者が、それらの談義所などを庇護していたのではないかと思います。それらの外護者の中には、とくにインテリ層では、こういった仏教の教義に興味がある人も多かったのではないでしょうか。そういった知識階級の人々が残した日本古典文学には、仏教の教理がベースとしてありますし、天台を離れて論ずることはできないといわれています。

矢崎　『源氏物語』に出てくる高僧の「横川の僧都」は、恵心僧都・源信をモデルとしているといわれていますし、『新古今和歌集』などにも仏教的な思想の影響が垣間見えるとよくいわれます。

藤平　『源氏物語』や『新古今和歌集』などの文学作品も、実は基礎として法華思想、つまり天台の思想があるわけです。ですので、古典文学の勉強をするなら、まず天台学からと昔からいわれるのです。

また天台の思想は、日本人の信仰のベースになっていることも見逃せません。天台の思想には、法華経の教えに、密教の神秘的なパワー、畏れに対する呪術的な力が加味された感覚で仏教用語を小さいうちから、暗記していったのではないでしょうか。ちなみに、江戸時代には「名目双六」といって、幼学のものに遊びながらでも天台の教えが学べるようなものまで作られています。

矢崎　この『津金寺名目』の内容に目を通してみますと、相当難しい事柄についても書かれていますね。これは、本当に初学者のために書かれたものなのですか。

藤平　おそらく、前提として天台大師の『法界次第初門』や源信の『四教五時略頌』などを充分に習得してから、次のステップとして「名目」を使用したのではないでしょうか。いずれにしろ、現代人は英語を書いたり読めたり出来るようになりましたが、その反面、漢文に触れる機会が減ってしまったので、漢文で書かれたこれらの「名目」は、敷居の高いものと感じる方が多いと思います。

●●●

矢崎　さて、著者の「穏海（一三三九～一四一三）」「尊舜（一四五一～一五一四）」といった学僧が活躍したこの時代は、鎌倉仏教の祖師達である法然（浄土宗開祖：一一三三～一二一二）、親鸞（浄土真宗開祖：一一七三～一二六二）、日蓮（日蓮宗開祖：一二二二～一二八二）らが比叡山を降りて各地で民衆を教化し、また比叡山焼き討ち（一五一七）までの時代ということになりますが、その頃の天台の様子は、一般的な歴史書には書かれないですし、あまり耳にすることもありませんでしたのでしょうか。

藤平　学問的にいえば、最盛期ともいえるかもしれません。各地に談義所とよばれる学問所が開設されて、多くの僧侶が学んでいたようです。津金寺もそうですが、茨城の千妙寺・月山寺、埼玉の大光普照寺なども談義所として有名です。また日蓮宗の本山でもあります身延山久遠寺の僧たちは、埼玉県川越市の喜多院などに来て、天台の教えを学び、書物を写し、持って帰りました。[注6]口伝法門といわれますが、一種の奥義のような大切な教えも伝えられています。今のような単なる宗派への帰属意識はそれほどなかったかもしれません。宗派のカテゴリーというよりは、学問的興味につき動かされて、学問所を転々としながら、勉強していたようです。またあるものは、自宗の教義を明確にするためにも天台を学ぶ必要があったのだと思います。

その後、比叡山は焼き討ちにあってしまい、多くの重要な典籍が焼失してしまいました。また長い歴史の中で火災などにより関東の有力寺院に大切に保管されていた文献は、不幸にも失われてしまったものも少なくありません。実はそういう大切なものの多くが身延山には残っておりまして、そういった七百年前に身延山の僧たちが持ち帰った天台の典籍を、天台宗典編纂所では、現在、逆に調査に行ってくるという仕事もしています。当時と全く逆のことを七百年後の今しているわけですね。

矢崎　今でも宗派を越えた付き合いが続いているのですね。当時の僧侶が、自由に学問を修めることができたということは、それを経済的に支えた有力者がいたわけですか。

藤平　おそらく当時の権力者が、それらの談義所などを庇護していたのではないかと思います。それらの外護者の中には、とくにインテリ層では、こういった仏教の教義に興味がある人も多かったのではないでしょうか。そういった知識階級の人々が残した日本古典文学には、仏教の教理がベースとしてありますし、天台を離れて論ずることはできないといわれています。

矢崎　『源氏物語』に出てくる高僧の「横川の僧都」は、恵心僧都・源信をモデルとしているといわれていますし、『新古今和歌集』などにも仏教的な思想の影響が垣間見えるとよくいわれます。

藤平　『源氏物語』や『新古今和歌集』などの文学作品も、実は基礎として法華思想、つまり天台の思想があるわけです。ですので、古典文学の勉強をするなら、まず天台学からと昔からいわれるのです。

また天台の思想は、日本人の信仰のベースになっていることも見逃せません。天台の思想には、法華経の教えに、密教の神秘的なパワー、畏れに対する呪術的な力が加味され、さらに比叡山と日吉神社のような神仏習合の思想も含まれています。本地垂迹（神様が仏様の仮の姿として現れると考える教え）か、神本仏迹（その逆に、神が主で仏が従うと考える教え）は別としても、天台では〝神様を拝むことと仏様を拝むことが矛盾しない〟と理論的に説明ができるのです。

矢崎　たしかに、この『津金寺名目』も、津金寺のある学僧が、戸隠神社の神前で拝んだときに、これを感得したと縁起に記してありますね。

日本人は、お盆には仏教にしたがって墓参りをし、結婚式で賛美歌を歌い、正月には神社へ行って初参りをしますが、もっとも当時キリスト教はありませんでしたが（笑）、このような日本人の根っこの部分には、天台の思想があるとも言えそうですね。

本日はありがとうございました。（終わり）

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

【用語解説】

注１『法華経』…鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』。仏の最も重要な教え、仏の本懐が説かれる。

注２『法華玄義』『法華文句』

『摩訶止観』…〝玄義〟〝文句〟は、法華経の真髄を説き、〝止観〟は、その実践方法を説く。

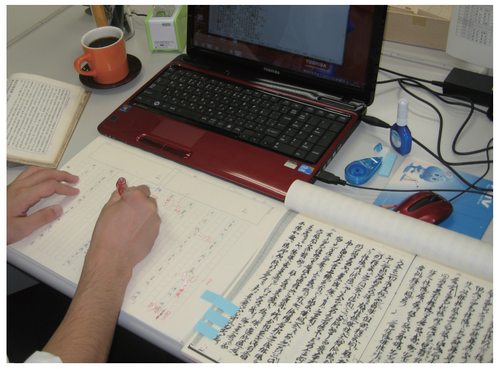
注３アビダルマ（阿毘達磨）…abhidharma の音写。abhi は〈～に対して〉、dharma は〈法〉と訳される。仏法に対する解説書。

注４『法界次第初門』…智顗著。仏教の基本的な教理を説明した書。

注５『西谷名目』…著者不明。天台宗の綱要を纏めた書。

注６『口伝法門』…口伝えに伝えられる奥義。秘伝の教え。

藤平寛田師（右）：天台宗典編纂所編輯員。昭和五十九年より同職。研究論文に、日光天海蔵『玄義第一大綱見聞』について、恵心流心賀法印談一海記『八帖抄』考、身延文庫蔵『摩訶止観見聞』中巻の一考察など。



天台宗典編纂所：昭和五十五年、天台宗に関する重要典籍の調査、保存、研究のために設立される。『續天台宗全書』『天台宗大辞典』『天台電子仏典』の編纂を主な事業とし、日本中世天台の研究を行う唯一の機関である。

津金寺名目（原本）：穏海、尊舜による著作。仏教では「智を目とし、行を足とし、清涼地に到る」といい、理論（学問）と実践（修行）が合致して行われることが重要だとされている。理論（学問）は、仏教の教義を学ぶことである。この名目はその入門書である。